慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初期福沢諭吉の中産層育成構想
Sub Title	The early thought of Fukuzawa Yukichi : middle class initiative
Author	姜, 兌玧(Kang, Tae-Youn)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2019
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・ 政治・ 社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.123, (2019. 12) ,p.35- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20191215-00035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期福沢諭吉の中産層育成構想

姜　兌　玧

一　はじめに
二　福沢の中産層育成構想
三　中産層への着目過程
　㈠　『西洋事情』に現れる「中人」「中等」
　㈡　自身の経験
四　福沢の中産層構想の特徴
　㈠　中産層と「学者」
　㈡　「富」と「学問」と「慶應義塾」
　㈢　中産層育成活動
五　おわりに

一　はじめに

本稿の問題意識は、初期福沢諭吉思想の具体的な検討作業の一環として、彼が一八七四（明治七）年『学問のすゝめ』五編で唱えた中産層育成構想について考察することを目的とする。

福沢が「ミッヅルカラッス」という用語を使って唱えた中産層育成構想は、明治維新を通して改まった中央集権国家システムにおいて、中央政府と人民との関係の再編成を唱えた新たな社会構造構想であった。維新以前、江戸時代においても藩ごとに存在する「社会的中間権力」を取り上げた研究は存在している。[1] 江戸時代の「中間権力」の場合、その様態は地域ごとに異なり、身分制度を中心とする幕藩体制の下で、その波及範囲や役割は藩を超えることはなかった。それに比べて、福沢の中産層育成構想はその役割が及ぶ対象が中央集権国家体制下の中央政府と国全体の人民である点から、江戸時代のそれとは違う、新時代に向けた新たな構想であったことがその特徴と言える。

また本稿では、福沢の中産層育成構想が一八六八（明治元）年刊行した『西洋事情』外編の議論と『学問のすゝめ』五編の議論との類似性に着目し、二つの著作の比較検討を行い、中産層育成構想との関係を分析する。外編において「望ましい人間像」として取り上げられた「ワット」や「ステフェンソン」といった人物は、『学問のすゝめ』五編にそのまま継承され、そのような人物集団の育成構想へと拡大していく。本稿ではこの点について具体的に検討し、それとともに、一八七四年当時福沢が読んだ西洋書物に現れる「ミドルクラス」はどういう性質のものであったのかについても、検討を試みる。

福沢の中産層育成構想の由来や意義、及び限界等を具体的に考察した研究は今までほとんどなかった。[2] この構想は江戸時代の「中間権力」とはまた違う、近代国家における「中産層」概念の始祖ともいえることから、重要な意味を

持つ。福沢は「自由」概念や「著作権」運動を初めて主唱する等、明治日本における先駆的な洋学者として広く知られているが、中産層育成構想をその作業の一環として捉えることができる。また、バランス感覚を重視した福沢の思想構造を中産層育成構想という観点から検討し、彼の華族・士族論等に新たな観点を提示するという点でも、中産層育成構想は研究の必要があるテーマであると考えられる。

本稿では、彼が構想した中産層育成構想を概括した上で、中産層構想に至るまでの着目過程、及びその特徴や意義、限界の考察を試みる。なお、ここでいう「初期」とは、広くは丸山眞男の区分のように、一八八一－一八八二（明治一四・一五）年を境としてその前の時期を指す。[3] 明治維新という新時代において、旧社会のイデオロギーを西洋の新思想を通して克服、改善していこうとしていた時期を指し、彼の変革の思想性が、主に時事新報の論客として活動していた後期に比べてより明確に現れている時期である。

二　福沢の中産層育成構想

一八七四（明治七）年、福沢は『学問のすゝめ』五編において、次のように述べている。

「国の文明は上政府より起る可らず、下小民より生ず可らず、必ず其中間より興て衆庶の向ふ所を示し、政府と並立て始て成功を期す可きなり。西洋諸国の史類を案ずるに、商売工業の道一として政府の創造せしものなし、其本は皆中等の地位にある学者の心匠に成りしものゝみ。蒸気機関は「ワット」の発明なり、鉄道は「ステフェンソン」の工夫なり、始て経済の定則を論じ商売の法を一変したるは「アダムスミス」の功なり。この諸大家は所謂「ミッヅルカラッス」なる者にて、国の執政に非ず、亦力役の小民に非ず、正に国人の中等に位し、智力を以て一世を指揮したる者なり。其工夫発明、先づ一人の心に成れば、これを

公にして実地に施すには私立の社友を結び、益其事を盛大にして人民無量の幸福を万世に遺すなり。此間に当り政府の義務は、唯其事を妨げずして適宜に行はれしめ、人心の向ふ所を察してこれを保護するのみ。[4]」

国の文明を進める存在は上の政府でも下の小民でもない「ミッヅルカラッス」（middle class）という中産層で、日本の文明発展のためにはその養成が必要であり、政府の役目はその活動を妨げずに保護することであると述べられている。当時の日本には、西洋の「ミドルクラス」に相当する人材は存在しておらず[5]、政府（官）と人民（民）に二分化された社会構造の理解が一般的であった。福沢は日本において初めて、中産層という新しい社会階層概念の導入を唱え、政府と人民を軸としていた社会区分の再編成を唱えた。

また翌年刊行された『文明論之概略』第九章においても、福沢は権力の偏重を日本が抱えている問題だと述べ、西洋諸国が「世間の商工次第に繫昌して中等の人民に権力を有する者あるに至れば、亦これを喜び或は之を恐れざる可らず。故に欧羅巴の各国にては其国勢の変ずるに従て政府も亦其趣を変ぜざる可らずと雖ども、独り我日本は然らず……[6]」と、西洋においては中産層の存在が権力の偏重を妨げる役割をすると述べている。明治初期、福沢は日本社会変革のために必要となる新しい社会階層の育成に関心を持ち、「ミッヅルカラッス」という用語を用いて、その役割を担う人材の集団である中産層の育成を唱えたのである。

三　中産層への着目過程

上述のように、福沢の中産層構想は当時まで日本には存在しなかった概念で、西洋思想の日本への導入の具体的な事例の一つであった。この章では中産層概念への着目過程について検討を試み、主に『学問のすゝめ』五編以前福沢

が接した西洋書物に現れる中産層概念と、福沢自身の翻訳著述家としての活動時代を取り上げ、中産層構想との関係を考察する。

その前に、一八七四年『学問のすゝめ』五編を執筆した時期に福沢が読んだ西洋著作から、中産層概念及び単語を直接引用した可能性について少し触れておく。福沢が使った「ミッヅルカラッス」という用語に関わる既存の先行研究を見ると、例えば猪木武徳は、『学問のすゝめ』五編を執筆する際に福沢がトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』を読み、そこに出てくる「middle class」をカタカナ表記に変えて使用し、また中産性概念にも着目したと述べている。[7] しかし一方で、福沢が読んだ西洋書物に関する松沢弘陽の研究によると、彼が『アメリカのデモクラシー』を読んだのは一八七七（明治一〇年）頃で、[8]『学問のすゝめ』五編を発表した一八七四（明治七）年とは時期が合わない。そのため、中産層概念を巡って一八七四年当時に福沢が読んだ西洋書物との関係は、もう少し詳しい分析が必要と考えられる。

㈠ 『西洋事情』に現れる「中人」「中等」

『学問のすゝめ』以前、福沢の中産層概念の認識は主に明治維新を前後して刊行された『西洋事情』に現れている。明治維新以前の、幕臣であった頃から福沢が中産層構想に関心を持っていたわけではなかった。一八三五（天保五）年、中津藩下級藩士の息子として生まれた福沢は、一九歳の頃から長崎と大阪に留学して蘭学を学んだ。大坂の適塾で学んでいた福沢は一八五八（安政五）年、中津藩からの命を受け江戸の中津藩中屋敷内に慶應義塾の原型となる洋学塾を開き、さらに英語を学ぶ等、続けて洋学に邁進した。そして一八六〇（万延元）年に初めて渡米した後、幕府の外国奉行支配翻訳御用御雇に任命され、一八六四（元治元）年には外国奉行支配調役次席翻訳御用となり、正式な幕臣となった。この頃の福沢は藩士、幕臣として中津藩と徳川幕府に仕えており、洋学を中心とした人材育成を

唱えるものの、中産層のような社会階層の変革を唱えていたわけではなかった。例えば藩士時代である一八六二（文久二）年四月、ロンドン視察中に中津藩士島津祐太郎宛の書簡においては「何卒御家ニても、肥前候に先鞭を着けられざる様、大変革之御処置有之度、私義も微力之所及は勉強仕、亡父兄之名を不損様仕度丹心ニ御座候」[9]と、中津藩が他藩に負けないように努力すべきだと述べている。また幕臣時代の一八六六（慶応二）年八月、幕府の長州再征に際し幕府の当路者に提出した建白書[10]では、「世間にて尊王攘夷抔虚誕の妄説」が流れ、その中で「第一着に事を始め反賊の名を取候者は長州」で、「此度長賊御征罰の義は天下の為め不幸の大幸、求ても難得好機会に御座候」と、幕府に対抗する長州藩を敵と規定した上で征伐を建白しており、同年一一月の書簡においては「大君のモナルキ」[11]が必要であると主張し、幕府を中心とする君主政の必要性を主張した。すなわち、福沢は「政府」側の一人として勤めていた。

この時期の福沢は翻訳活動を中心に、洋学を日本に伝播する翻訳著述家として、多くの西洋書物を翻訳・編纂した。その中で大ベストセラーとなったのが一八六七（慶応三）年に出版した『西洋事情』初編、及び一八六九（明治二）年出版した同外編である。ここで福沢は、「中人」「中等」という言葉を使って、西洋の中産階級について認識していた。例えば『西洋事情』外編において、福沢は都市の水道に関して論じながら、「窮民と雖ども饒かに之を用ひ、価も亦甚だ廉なり。家産中等の市民へは稍や其価を高くすれども、一日に半「ペンス」の割合を以て幾許の水を用ゆるとも妨なし」[12]と、ジョン・ヒル・バートンの『政治経済学』[13]を翻訳して載せている。ここでは「窮民」（原文は poor working-people）[14]と対比する経済階層として「家産中等の市民」（原文は middle classes）[15]を理解している。

また『西洋事情』二編においては、フランスの歴史を論じながら「カペトの天稟、中人以上の人物に非らず」[16]「国内中人以上の種族」[17]「中人以下の輩」[18]といった用語を使用している。これは福沢が愛用していたと言われているリプリーの百科事典[19]が種本で、各々 'prestige of neither past glory nor genius'[20], 'The privileged orders'[21], 'The third estate'[22]が

原文に当たっている。ここでの「中人」は、名望のある貴族階級の意味として使われており、これがフランスの史記であることを考えると、第一身分の聖職者と第三身分の市民や農民の間に位置する社会階層を「中人」と理解していたと考えられる。

さらに、『学問のすゝめ』五編で中産層の例として挙げられている「ワット」(James Watt) と「ステフェンソン」(George Stephenson) は、既に『西洋事情』外編に紹介されている。外編の「世人相励み相競ふ事」章において、福沢は「文明の教漸く行はれ、人々徳行を修め智識研くに至て、世の形勢全く其趣を異にし、人自から利達を求れば、共に他人の利達を致し、人自から富福を求れば、自己の力を用て他人の物を貪ることなし」[23]と、個人の利潤追求が自身の経済的独立だけでなく、他人の利潤にもつながると述べた上で、加えて「ワットの伝」と「ステフェンソンの伝」を付録として載せ、これらの人物は「其発明に由て自から高名利達を得、又兼て天下のために大利を起せり」と述べている。外編にはこの二人以外にも紡績機関を発明した「ハルグリーウス」(James Hargreaves) と「アルクライト」(Richard Arkwright) の例も挙げられている。「ワット」や「ステフェンソン」といった、蒸気機関と鉄道の発展に大きく寄与した人物の話を通して、福沢は政府政策ではなく個人の努力による発明によって発明者は利潤を受け、それと共に社会も進歩するという趣旨を明確に表した。上述のように、『西洋事情』外編はバートンの『政治経済学』前半部の翻訳書であるが、ワットとステフェンソンについての記述は原書には載っていない内容で、福沢が後からリプリーの百科事典から該当内容を抜粋、翻訳して載せた部分である。つまり、この部分に当たって福沢は追加資料等を補足しながら、詳しく記述したのである。

『西洋事情』外編と後の『学問のすゝめ』五編を比較すると、個人から集団化へと、論議の拡大がみられる。『西洋事情』外編における「ワット」と「ステフェンソン」は、「個人」として登場する。これらの人物が登場する「世人相励み相競ふ事」章は、社会における人間の性質について論じている章で、望ましい人間像の一環として語られてい

る章である。外編で福沢は「ステフェンソンの伝」末尾に「真に英国人の気風ありて世間の人望をえたりしと云ふ」[24]と、リプリーの百科事典からの翻訳ではなく、独自に記述を加えて「ステフェンソン」を評価しているが、それは、望ましい「人物像」の一例としての評価であった。一方で『学問のすゝめ』五編における福沢の問題意識は「国の独立と文明開化」であり、それを達成するためにはどうするべきか（気風の一掃）、また「誰」がその作業をリードしていくべきか（「ミッヅルカラッス」）の問いから、議論が展開されている。ここで福沢は、『西洋事情』外編で述べた人物像を再び取り上げ、このような気風を持つ人物の「集団」を育成することが必要であると唱えたのである。

では福沢が使った「ミッヅルカラッス（middle class）」という用語自体は、どこからヒントを得たもので、西洋書物にはmiddle classがどういう風に書いてあったのか。前述のトクヴィルを除けば、管見の限り、直接的な影響を与えた西洋書物は見当たらなかったが、『学問のすゝめ』五編を著した一八七四年頃に福沢が読んだとされている書物の中で、一つ触れておきたいのはバックル（Henry Thomas Buckle）の『英国文明史』[25]である。第四章「精神法則は道徳法則と知的法則に対する道徳的、或は知的比較である……そして各々が社会の発展に及ぶ影響の調査」[26]には、中産層（原文はmiddle, or intellectual class）について論じられており、一八－一九世紀現在中産層は「公と私を問わず教育、教育立法、君主のけん制といったあらゆる領域に影響を及ぼしており、そして何より、憲法上の王子や主権者よりも世論の優位が厳格に守られるという土台を確実に定着させた」[27]と、一九世紀における中産層（知識人層）の台頭が述べられている。第四章は文明化において道徳感情及び知的能力と文明化の相関関係を検討する章で、ここで中産層（知識人層）は、知的能力の代弁者として位置づけられており、火薬等の発明によって軍人や聖職者層と中産層の役割が明確に区分されていき、知的能力を持つ中産層が台頭するようになるという趣旨の中から論じられている。

こういったバックルの「中産層像」が『学問のすゝめ』五編にどれだけ影響を及ぼしたかについては、またさらなる検討が必要である。また福沢が一八七五（明治八）年刊行した『文明論之概略』執筆の際に『英国文明史』を参考

にしたこと、そして同じ年に同書が第四章まで翻訳されていたことは確認できるが、[28]『学問のすゝめ』五編執筆の一八七四年に福沢がバックルの本を読んでいたかは定かではない。管見の限り、『学問のすゝめ』五編と『西洋事情』外編間の記述の類似性からみて、中産層構想のアイディアは、外編からの影響であると考えられる。

このように、初期の西洋書物や百科事典を通して、福沢は西洋の中間層概念についてある程度把握していたと考えられる。もちろん、前述のように福沢は当時幕臣、つまり政府の役人として働いていたため、実際に中間層構想を提言してはいなかったが、のちの中産層構想に関するヒントをこの時期に得ていたと考えられる。中産層概念への着眼は、『学問のすゝめ』五編を書いた時期に突然生まれたものではなく、彼が続けてきた洋学研究を通して蓄積してきた経験の産物なのであった。

(二) 自身の経験

明治維新後福沢の足跡を見ると、『西洋事情』外編に現れる中産層概念に類似する経済活動を行った時期があったことが確認できる。ここでは、その活動について触れ、それを後の中産層構想発表の一つのきっかけである可能性として提示する。

福沢が仕えた徳川幕府と中津藩は、第二次長州征伐の失敗を皮切りに、大政奉還、江戸開城、版籍奉還等を経て消滅した。それに伴い、福沢も一八六八（慶應四）年三月四日、新政府からの幕府御使番の任命を病気と称して断り、同年六月八日には幕府へ退身願を提出し、八月一〇日の上洛命令も病気を理由に辞退した。福沢がどういった心境で幕府と決別したのかに関しては様々な研究が行われているが、[29]ともあれ、幕臣の身分から離れ、新たな道（特に経済的）を模索しなくてはならなくなったのは確かであった。

新しい生き方を模索しなければならない問題は福沢に限らず、武士階級全体に共通するものでもあった。幕府がな

くなり大名もなくなった時代に、武士たちは、これからどのように生きていけばいいのか、自分たちの力で生き方を根本から変えていかなければならない、と考えなければならなかったのである。[30] 福沢も、一八六九（明治二）年旧中津藩士簗紀平宛の書簡において、これから武士は「無産の流民」[31]になると述べ、武士という階級だけで生きていける時代は終わりであることを熟知していた。

この時期に福沢が選んだ道は二つで、翻訳という専門技術を用いた著述家と、教育者としての慶應義塾の経営であった。既に『西洋事情』等の成功により、翻訳著述家としての地位を固めていた福沢としては、幕臣という地位を捨てることによって翻訳著述家の業務に邁進することに決めたのである。一八六七（慶応三）年一二月中津藩士福沢英之助宛の書簡において福沢は「小生輩世事を論すへき身ニあらず。謹て分を守り、読書一方ニ勉強いたし居候」[32]と、以前まで藩士や幕臣として行った政策提言を行う立場から一歩引き、自身の勉強に邁進する意志を表している。それとともに中津藩の屋敷内に位置し、中津藩との関係とかけ離れられない存在であった慶應義塾も、一八六八（慶応四）年四月芝新銭座に移して名実ともに私塾化[33]することで、本格的な「私人」としての生活を始めた。この時山口良蔵宛の書簡で福沢は「今人之知識を育せんとするには、学校を設けて人を教るニ若くものなし。依而小生義ハ当春より新銭座ニ屋敷を調、小学校を開き、日夜生徒と共ニ勉強致居候」[34]と、慶應義塾設立の趣旨を述べている。

翻訳作業は、福沢の経済的独立と直結するものであった。幕臣でなくなった福沢が経済的に独立できる道は、著作の出版がほとんど唯一の道であった。一八六七年から一八七〇（明治三）年までの間に福沢が出版した著作は『西洋旅案内』、『条約十一国記』、『西洋衣食住』、『訓蒙窮理図解』、『兵士懐中便覧』、『洋兵明鑑』、『掌中万国一覧』、『英国議事院談』、『世界国尽』等で、最も多くの翻訳書及び自身の西欧経験を基盤にした著作活動を行った時期でもあった。そのうち『西洋旅案内』、『条約十一国記』、『訓蒙窮理図解』、『世界国尽』等は驚異的というべき売行きを見せた。[35]

一八六八年六月七日紀州藩士山口良蔵宛の書簡[36]には、翻訳著述家という「一小民」として生きていくことを誓った

福沢の行動規範が凝縮されている。ここで福沢は「小生義も此節ハ全く閉戸、一歩も外出不致、読書翻訳ニ従事いたし居候」と、読書と翻訳に従事している近況を伝えた後、「旅案内、十一国記、差上候処、此亦相達し、十一国記ハ既ニ売れ、旅案内ハ偽物沢山ニ而いまた其尽有之よし、致し方無之、宜敷御取計奉願候。……翻訳家も春来上方之偽版流行ニ者誠ニ困却之至、既ニ此節も訳書ハ色々出来居候得共、開版売出し出来不申、何とか偽物之防御相立不申而者折角之訳書もにぎりつぶしなり……況ヤ翻訳之書ハ偽版之為メに妨られ、当春より一冊も新奇之訳書ハ出不申、何を以て天下之知識を開かんや、実ニ兵禍と申スハ可恐ものニ御座候」と、自身の著作の偽版が横行していることを嘆き、それが世の知識発展の妨げにもつながると述べている。続けて「此後ハ双刀を投棄し読書渡世の一小民と相成候積、左様御承知可被下候」と、幕臣以降の時代において「一小民」として生きることを決意した上で、「右之次第ニ付、以来ハ翻訳ものも現金ニ而仕候。……直段大凡左之通りニ御座候。一　兵書。窮理書。地理書。舎密書。新聞紙之類　十行二十字之訳書壱枚ニ付　代金壱両　一　政治書。経済書。万国公法。兵制論等　都て議論文、同断ニ付代金壱両三分。右之通り何時ニ而も、日を限り無想違翻訳仕候」と、職人としての具体的な翻訳代の明細を示し、翻訳の仕事に従事することを明言している。このような金銭やり取りの書簡は、明治維新を前後する時期に特に多く見られる。

こういった福沢の著作活動は、個人の利潤を追求すると同時にその結果物が社会全体にも役立つという点から、『西洋事情』で言及したワットやステフェンソンの功績と非常に類似している。また後述するが、『学問のすゝめ』で述べている福沢の中産層構想には「学者」と「慶應義塾」が含まれている点から、この時期行われた個人の経済活動も、中産層構想に影響を及ぼしたと考えられる。

四　福沢の中産層構想の特徴

この章では、『学問のすゝめ』五編における福沢の中産層構想に戻り、その特徴や意義について考察を試みる。

㈠　中産層と「学者」

福沢は、「今我国に於て彼の「ミッヅルカラッス」の地位に居り、文明を首唱して国の独立を維持す可き者は唯一種の学者のみ」[37]と述べ、中産層に「学者」概念を含めている。続けて「此学者なるもの時勢に付き眼を着すること高からざるか、或は国を患ること身を患るが如く切ならざるか、或は世の気風に酔い只管政府に依頼して事を成す可きものと思ふか、概皆其地位に安んぜずして去て官途に赴き、些末の事務に奔走して徒に身心を労し、其挙動笑ふ可きもの多しと雖ども、自からこれを甘んじ人も亦これを怪まず、甚しきは野に遺賢なしと云てこれを悦ぶ者あり」と、既存の学者層を批判した上で、「独り我慶應義塾の社中は僅にこの災難を免れて、数年独立の名を失はず、独立の塾に居て独立の気を養ひ、其期する所は全国の独立を維持するの一事に在り」[38]と、慶應義塾の学風を持った学者のみがその中産層に相応しい精神を保っていると述べている。

経済的意味の強い中産層概念に、学術的意味の強い「学者」、具体的には「慶應義塾」を統合し、教育による中産層育成を唱える福沢の構想は、ヨーロッパの中産層認識とは違う、福沢が唱える中産層概念の特徴と言える。抑々『学問のすゝめ』五編は、「学者職分論」を唱えた四編と連動する性格を持っており、「四、五の二編は学者を相手にして論を立てしもの」[39]である。四編において政府内ではなく民間領域における「学者」の役割や使命を論じた上で、その学者層が創っていくべき階層が中産層であることを福沢は主張している。

福沢が『学問のすゝめ』で一貫して主張しているのは、政府と人民の関係の再定立である。福沢は日本社会を政府（官）と人民（民）に二分化し、政府と人民の関係性が続くと日本の独立は保てないと述べている。政府は圧政を繰り返して人民を統治の対象としかとらえず命令を下すのみで、人民は長く続いてきた政府の圧政によって無気力かつ愚かな存在となり、独立精神を失っている。たとえ人民の中で有能な人材が現れても、その人材はその能力を持って政府側に入ることのみを目指し、一旦政府に入ると同じく圧政を繰り返すようになる。こういった関係性を批判した福沢は、その気風を一掃する作業が必要だと述べ、それができる者は「一種の洋学者」のみで、その問題意識に基づいて新たな社会の気風をリードしていく階層が「ミッヅルカラッス」、つまり中産層であると述べている。当時の日本社会における伝統的な「公」と「私」の概念を崩し、単なる統治の対象ではなく固有の分を持った存在の育成の具体化が、福沢の中産層概念の特徴である。[40]

こういった福沢の社会構造認識は、日本が明治維新という新時代に入ったからこそできるものであった。明治維新以前の江戸幕府の社会構造の基本は、秀吉から受け継いだ国家君主としての権力で、将軍以下の武士階級が小家族（小農民）を基礎とする社会を掌握・支配するために、幕府（将軍）と藩（大名）とを基軸とした機構・組織である。[41] そして各藩内における「中間」的な存在、つまり「中間権力」は江戸時代にも存在していた。それは大庄屋のような藩内の統治構造によって、或は商業の発達につれて台頭した豪富商によって発生した階層であった。[42] しかし、江戸時代は基本的に身分制度が存在し、藩という地域を基盤とした組織が維持されていた時代であった。中間団体の機能や中間層の存在形態などは当然のことながら所領ごと・地帯ごとに異なる。[43] また中間層の機能や役割も、地域内で権力を持ち、秩序を維持することであった。将軍と大名を中心とする身分社会であった江戸時代において、中間権力の波及範囲が地域を超えると「反逆」という形になることを考えると、ある意味それは当然のことである。

一方で福沢の中産層構想は、中産層の役割が全国に広まり、国全体の気風を一掃することを前提としている。中産

層の役割は政府と人民両方を一新し、国の独立のための文明開化精神を普及することで、上には中央政府が直接的対象となり、下には各藩の人民ではなく日本中全ての人民が対象となっている。それは、版籍奉還や廃藩置県を通して新たに整備された近代的中央集権国家体制における、新たな階層創出構想であったと言えよう。

西洋の中産層に比べると、西洋の中産層が国家の統制を拒否し、自由な経済活動を通して富を蓄積した商工業者をその始めとし、後に経済的中産階層を指すという「結果」を意味するならば、福沢が想定する中産層は富と学問の両方を基盤にし、政府と一般庶民の間に位置する、今まで日本には存在していなかった階層概念で、これから成し遂げていくべき「目標」であった。西洋においての中産層が時には「無気力な存在」として批判の対象になることに対して、福沢は中産層の存在を非常に評価し、育成するべき対象としてみているのも特徴的である。(44)

石井寿美世は、福沢にとっての「ミッヅルカラッス」が、有産階級として自らの富・意志・知識を以て商工業に従事して同業者と協同し、一国及び地域の経済を担い、民間から社会を牽引する職分を負った存在であり、ここに、「西洋諸国の富強」に追いつく経済力を培う基盤となる経済主体のモデル(45)があったと述べている。このような経済的な意味に加えて、彼の初期著作に言及されているミドルクラスの原型と言えるような概念や人物を分析すると、社会的な名望のある存在も「ミッヅル」という中間層として福沢の念頭にあったと考えられる。

㈡　「富」と「学問」と「慶應義塾」

福沢は中産層に相応しい存在を、「一種の学者」と、「慶應義塾の社中」のみであると述べ、「ワット」や「ステフェンソン」、「アダムスミス」といった、個人が行う経済活動がその人の利潤を満たすと共に、それによる産物が国の発展にもつながる人物をその例として挙げている。それを踏まえた上でここでは、中産層概念における「富」と「学者」、そして教育機関としての「慶應義塾」との関係について考察を試みる。

富と学問を同時に追求し、さらにその気風を養う場を慶應義塾といった教育機関に限定したことは、富創出の専門性と、教育機関としての学術振興との間の乖離を生んだ。明治初期の慶應義塾は総合教育機関であって、その教育内容は英語を中心に地理、窮理、歴史等、洋学に関する学問全般であり、[46] 特定の専門技術を学ぶような所ではなかった。慶應義塾のような教育機関の役割及び社会的位置づけについては、福沢も著作を通して言及していた。例えば『西洋事情』初編の「学校」章において、福沢は「学校は政府より建て教師に給料を与へて人を教へしむるものあり、或は平人にて社中を結び学校を経て教授するものあり」[47] と、学校の種類には官立学校と私立学校があることを明確に認識しており、また『学者安心論』においては、「政府にて、学校を立てゝ生徒を教へ、大蔵省を設けて租税を集るは、政府の政なり。平民が、学塾を開て生徒を教へ、地面を所有して地代小作米を取立るは、之を何と称す可きや。政府にては学校と云ひ、平民にては塾と云ひ」[48] と、政府の学校と同等なる民間学校としての塾という認識を持っていた。前述したリプリーの百科事典によると、当時ヨーロッパには既に現在に近い大学制度が整備されており、現在の学士、修士、博士といった用語の学制システムも整備されていた。[49] また福沢も、『西洋事情』初編の「学校」において「初て入る学校を小学校と云ふ。先づ文字を学び、漸くして自国の歴史、地理、算術、天文、窮理学の初歩、詩、画、音楽等を学ぶ。斯の如くすること七八年、諸学漸く熟し、又大学校に入る。此学校にても学科以前と異ならずと雖ども、稍高上の教を受く。且此所にては尽く諸科を学ばずして、各々其志す所の一二科を研究す」[50] と述べ、一般学校と大学の違いを熟知していた。

一方で、大学のような研究機関に近い形で慶應義塾を運営することに福沢は否定的であり、福沢にアカデミックな学者（scholar）意識、つまり既存の学問の先端化を目指して、学問自体の改良あるいは発展を追求する意思は見られない。一八七三（明治六）年中上川彦次郎宛の書簡で「今の学者読書に耽る勿れ、書に耽るも酒色ニ耽るも其罪ハ同し。唯有眼の人物ニして、始て読書中ニ商売を為し、商売中ニ書を読ミ、学而富ミ富而学び、学者と金持ちと両様の

地位を占メ、以て天下之人心を一変するを得へきなり」[51]と述べているように、福沢にとって学問はそれ自体のさらなる工夫だけが目的ではなく、学問を通して習得した知識、精神を富と連携させることも重要であった。学問と富は、相互補完的な関係であったのである。福沢にとって学問そのものを追求することは、生産性を担保しない「むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽み、詩を作るなど、世上に実のなき文学」[52]と類似する、彼自身が批判した儒学の弊害を連想させるものであったのかもしれない。

中産層育成の場である慶應義塾が専門学校のような技術養成所ではなく、また大学のような専門教育機関でもなかったことは、いずれにせよ慶應義塾が自ら富を創出することは難しかったことを意味する。したがって、富と知識両方の養成を唱える福沢の構想もその実現はなかなか為しがたいものとなった。つまり、「ワット」や「ステフェンソン」のように、自ら技術を磨いて、その分野において進歩を成し遂げることで財産を増やすことも、「アダムスミス」のように研究を進めて職業としての学者（scholar）になって財産を増やすことも難しかったのである。慶應義塾で「学問」を学んだ門下生たちが「富」の創出といった商工業活動を行う難しさについては福沢も懸念していた。同五編において福沢は「読書は学問の術なり、学問は事をなすの術なり」と述べた上で、「実地に接して事に慣るゝに非ざれば決して勇力を生ず可らず。我社中既に其術を得たる者は、貧苦を忍び艱難を冒して、其所得の知見を文明の事実に施さゞる可らず」と勇気をもって実践に挑むことを呼びかけ、商売、法律義、工業、農業、著書、訳述、新聞の出版に挑むように唱えている。[53]「学者」の「商売工業」への従事を、「勇気」という一種の非合理的な信念で補おうとする判断であったと考えられる。[54]

(三)　中産層育成活動

中産層構想の実現におけるこのような問題を抱えた上で、福沢は既に財産を持っている華族層の協力を得て、各地

に慶應義塾の学風を継ぐ学校設立に取り組んだ。一八七〇年には三田藩の洋学校開設計画には多大の関心をよせ[55]、その計画を巡って岩倉具視と相談を交わし[56]、一八七一年には翌年建てられた足柄県の「日新館」（小学校）と「共同学校」（中学校）の設立を提案した[57]。また、旧中津藩主奥平昌邁の申請により設立された中津市学校に関しても、福沢や慶應義塾はこれに積極的に協力し、慶應義塾の学則に従って規則が設けられたほか、福沢は組織づくりにも関与した[58]。その他にも大阪に慶應義塾分校設立のための取り組み[59]、私立篠山中年学舎や岡山洋学校の運営に関して助言ないし慶應義塾卒業生の教師派遣が行われる等、福沢は全国の各地にかけて「ミッヅルカラッス」構想に相応しい教育機関の設立に取り組んだ。慶應義塾の学風を持った私学校を地方に伝播しながら、福沢は商工業にも多くの関心を寄せた。一八七四年一一月には森有礼の依頼を受けて「商学校を建るの注意[60]」を書き、その翌年創設された商法講習所に対して商業学校を設立する趣旨、及び具体的な科目並び要項を提案した。また、慶應義塾出身の企業家である早矢仕有的や中上川彦次郎等、多くの企業家とも深く交流するなど、彼の経済学への関心は至大なものであった。

このような学校設立の多くは、旧藩主や士族の寄付金といった、既に財産を持っている華族・士族たちの動きによって達成されたものであった。「学問」が直接的な富を創出することが難しかったことから、福沢は既に財産を持っている華族層を啓蒙させ、その財産を社会の文明化に回そうとしたのである。福沢としては、華族が自ら学問に取り組み、模範を見せていくということとともに、華族がその資産を有効活用して教育に投資してほしいと願っていた[61]。上述の学校設立はその一定の成果であったものの、全体的にその取り組みはうまくいかなかった。廃藩置県後、明治政府の奨励政策もあって、慶應義塾には若い二十歳前後の華族が大量に入学した。しかし、慶應義塾に学んだ華族門下生の成績は極めて悪く、不適切な資産管理や華美な生活によって財産を雲散霧消させてしまい、華族の財産を中産層の気風養成に回そうとした福沢の構想は壁にぶつかり、華族に対する福沢の不信感は根深いものとなり、後にもその不信感を開陳し続けていった[62]。

このような、今まで独立的に取り上げられてきた福沢の華族・士族論は、社会における中産層育成の目的意識の下で行われたことでもあったと考えられる。「ミッヅルカラッス」だけではなく、「学者職分論」『学者安心論』においての「学者」や、『分権論』においての「士族」等、福沢の思想には常に人民と政府の間に立って双方を調律し、文明開化の気風をリードしていく階層が想定されている。中産層育成構想は、その根底にある福沢の考え方を把握することができる、代表的な概念であると考えられる。

五　おわりに

福沢の「ミッヅルカラッス」論は、日本における初めての近代的中産層育成の動きであった。それは、藩士・幕臣の頃から長い間洋学者として積んできた見聞と知識の産物で、彼の初期思想において欠かせない近代的な性質の概念であった。西洋の中産層と比して、福沢にとっての中産層は日本の文明の進歩という課題も含め、成し遂げるべき「目標」であった。彼は中産層育成構想を通して、今まで政府と人民で二分化されていた社会階層の再編成を唱え、政府側に寄せられている権力の偏重を崩すと同時に、民間社会の自立と活性化を図った。

教育機関である慶應義塾のみが中産層の気風を保てる唯一な場であるという構想は、「富」と「学問」の関係において乖離を孕んでいたため、慶應義塾の学者が経済活動を通して富までを生産することは相当な「勇気」が必要な作業であった。中産層養成の場である慶應義塾が、単独で福沢が構想する中産層を育成することは難しかったため、福沢は地方における慶應義塾系私学校の設立、及び商工業への関心と提言を寄せることで、中産層の気風を普及しようとした。このように、福沢の構想は「富」と「学問」の同時追求という高い水準の行動規範を要求していたが、社会の中での中間層の存在と役割に早くから着目していた点から、西洋近代思想導入において先駆的な役割を果たしたと

言える。また、明治維新という新時代において四民平等を唱えた福沢が、既存の財産や名望といった旧身分制度の名残を利用して中産層構想の実現を図ったことは、彼の中産層育成構想の限界とも言えると共に、西洋とは違って、人工的に知識と財産を同時に持つ中産層を育成しようとする福沢の試みがどれだけ難しかったかを表す証拠とも言える。

今後の課題として、福沢が唱えた中産層育成構想と実際の成果との因果関係を究明することは、さらなる研究が必要なところである。つまり、福沢の中産層構想に実際の慶應義塾出身の企業家たち、或は地方の私学校設立者たちがどれほどそれに共感し、実際の経済・教育活動にその意思が反映されたかを分析することはさらなる研究を要する作業である。また、後の時代に見られる福沢の「官民調和」論との関係についても、さらなる研究の必要があると考えられる。民が選挙を通じて官を構成する、という福沢の政治構想において、中産層はどんな役割を果たすべきだと考えられていたのかは、福沢における中産層研究としてまた興味深い課題と考えられる。

（1）志村洋・吉田伸之編『近世の地域と中間権力』（山川出版社、二〇一一年）参照。

（2）福沢の中産層構想については、石井寿美世「福沢諭吉における「ミッヅルカラッス」と地方富豪」（『福沢諭吉年鑑』第三七巻、二〇一〇年）（以下「ミッヅルカラッス」）の研究が存在する。これは主に中産層の経済的役割に焦点を当てた研究で、「ミッヅルカラッス」論の検討と共に地方富豪との関連性が中心に論じられている。

（3）丸山眞男著、松沢弘陽編『福沢諭吉の哲学：他六篇』（岩波文庫、二〇〇一年）、一三頁。

（4）慶應義塾編『福沢諭吉全集』第三巻（岩波書店、一九六九年）、六〇－六一頁。

（5）前掲「ミッヅルカラッス」、五六頁。

（6）慶應義塾編『福沢諭吉全集』第四巻（岩波書店、一九六九年）、一五二頁。

（7）猪木武徳『自由の条件：スミス・トクヴィル・福沢諭吉の思想的系譜』（ミネルヴァ書房、二〇一六年）、八四－八五頁。

（8）松沢弘陽「社会契約から文明史へ」（『福沢諭吉年鑑』第一八巻、一九九一年）、一九二頁。松沢によると、福沢がトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』一巻を読んだのは一八七七年六月二四日から七月二五日までで、また一八七七年七月

以降、二巻のはじめの若干章を読んだと述べられている。

（9）慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第一巻（岩波書店、二〇〇一年）、一二－一四頁。

（10）慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二〇巻（岩波書店、一九七一年）、七－一一頁。

（11）前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、六四－六六頁。

（12）慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一巻（岩波書店、一九六九年）、四四三頁。

（13）Burton, John Hill, *Political Economy, for Use in Schools, and for Private Instruction*, Edinburgh: William and Robert Chambers, 1852（以下 *Political Economy*）.

（14）Ibid., p. 86.

（15）Ibid., p. 43.

（16）前掲『福沢諭吉全集』第一巻、五六一頁。

（17）前掲『福沢諭吉全集』第一巻、五七八頁。

（18）前掲『福沢諭吉全集』第一巻、五八〇頁。

（19）全一六巻の百科事典で、一九六二年欧米使節団としてヨーロッパを訪問した際買ったと推定されている。福沢はこの百科事典を愛用し、『西洋事情』の史記編、『万国窮理図解』等多くの初期著作にこの事典を用いたと言われている。詳しくは太田臨一郎「福沢諭吉著訳書の原拠本について」（『福沢諭吉年鑑』第三巻、一九七六年）を参照。

（20）Edited by Ripley, George and Dana, Charles A., *The new American cyclopaedia: a Popular Dictionary of General Knowledge vol 1-16*, New York: D. Appleton, 1859-1867. Vol 7, p. 669.

（21）Ibid., p. 673.

（22）Ibid..

（23）前掲『福沢諭吉全集』第一巻、四〇〇頁。

（24）前掲『福沢諭吉全集』第一巻、四〇八頁。

（25）本稿で用いた本は Buckle, Henry Thomas, *History of Civilization in England Volume 1*, London: Grant Richards, 1857 である。

（26）原文は「Mental Laws are either Moral or Intellectual Comparison of Moral and Intellectual Laws, and Inquiry into the

Effect produced by each on the Progress of Society.」

(27) Ibid., p. 162.

(28) 詳しくは安西敏三『福沢諭吉と西欧思想』（名古屋大学出版会、一九九五年）、vi及び一六四－一六九頁を参照。

(29) 福沢が幕府と決別した理由について、例えばひろたまさきは「幕府を倒した維新政権が文明開化の最大の敵と目してきた攘夷派であった」点を、北岡伸一は「第二次長州征伐の屈辱的失敗以降、福沢は幕府にほとんど希望を持てなくなった」点を挙げている。ひろたまさき『福沢諭吉』（岩波書店、二〇一五年）第五章、北岡伸一『独立自尊――福沢諭吉の挑戦』（中公文庫、二〇一一年）第五章を参照。福沢の幕臣時期について重点的に取り扱った研究は中島岑夫『幕臣福沢諭吉』（ティビーエス・ブリタニカ、一九九一年）を参照。

(30) 小室正紀編著『近代日本と福沢諭吉』（慶應義塾大学出版会、二〇一三年）、三一頁。

(31) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、一三三頁。

(32) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、八二頁。

(33) ひろたまさき『福沢諭吉』（岩波書店、二〇一五年）、九六頁。

(34) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、九三頁。

(35) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、三七七頁。

(36) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、一〇〇－一〇二頁。

(37) 前掲『福沢諭吉全集』第三巻、六一頁。

(38) 前掲『福沢諭吉全集』第三巻、六一頁。

(39) 前掲『福沢諭吉全集』第三巻、五七頁。

(40) 福沢における「公」と「私」の研究については、松田宏一郎の研究（松田宏一郎「福沢諭吉と「公」・「私」・「分」の再発見」『立教法学』第四三号、一九九六年）を参照。

(41) 佐々木潤之介『江戸時代論』（吉川弘文館、二〇〇五年）一一頁。

(42) 前掲『近世の地域と中間権力』参照。

(43) 前掲『近世の地域と中間権力』ii頁。

(44) 前掲『自由の条件』、八六頁。

(45) 前掲「ミッヅルカラッス」、五五頁。
(46) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一九巻（岩波書店、一九七一年）、三七二頁。
(47) 前掲『福沢諭吉全集』第一巻、三〇二－三〇三頁。
(48) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第四巻（岩波書店、一九七〇年）、二一八頁。
(49) 例えばフランスの場合大学は四年制で、二年間在学後、学士学位をとるため今まで学んだことを再学習するか否かを決め、三年半の勉強の後、卒業試験を受けて合格すると学士学位をとることができる。その後さらに三年半間学んで修士学位試験を受け、さらにその後学問を続けて博士学位をとることができる。（*The new American cyclopaedia*: Vol 15, p. 837.）
(50) 前掲『福沢諭吉全集』第一巻、三〇三頁。
(51) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、二六七頁。
(52) 前掲『福沢諭吉全集』第三巻、三〇頁。
(53) 前掲『福沢諭吉全集』第三巻、六一－六二頁。
(54) 前掲「ミッヅルカラッス」、五八頁。
(55) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、三九二頁の「福沢と摂州三田藩」を参照。
(56) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、一八三－一八四頁。
(57) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、二一五－二一六頁。
(58) 小川原正道『福沢諭吉の政治思想』（慶應義塾大学出版会、二〇一二年）、一三九頁。中津市学校の設立を巡っては前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻三九六頁の「中津市学校の設立」及び西沢直子「中津市学校に関する考察」（『近代日本研究』第一六巻、二〇〇〇年）を参照。
(59) 前掲『福沢諭吉書簡集』第一巻、二八七頁。
(60) 前掲『福沢諭吉全集』第二〇巻、一二三－一二五頁。
(61) 前掲『福沢諭吉の政治思想』、一四一頁。
(62) 前掲『福沢諭吉の政治思想』、一四二－一四四頁。

姜　兌玧（カン　テユン）
所属・現職　慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程
最終学歴　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程
専攻領域　日本政治思想史
所属学会　日本政治学会、日本法政学会
主要著作　「初期福沢諭吉の人種観――S. A. ミッチェル問題――」『法学政治学論究』第一一四号（二〇一七年）
「初期福沢諭吉の人間観――権利、義務、労働――」『法学政治学論究』第一一六号（二〇一八年）